

ガボン共和国水産資源 沿岸調査報告書

昭和53年11月

国際協力事業団

JICA LIBRARY



1064094E4J

国際協力事業団	
受入 月日 '84. 4. 21	510
	89
登録No. 03739	FDT

は し が き

ガボン共和国は、1960年フランスから独立した新興国であり、豊富な森林資源と石油資源の開発を主体に第1次5カ年計画(1966~1970)及び第2次5カ年計画(1971~1975)を進めてきたが、第3次5カ年計画(1976~1980)にて漁業政策をも包含して推進することになり、わが国に協力を要請越した。

これを受け、国際協力事業団は開発調査事業の一環として水産資源調査を実施することとし、昭和52年3月より3週間に亘り陸上調査団を派遣し、同年9月13日両国間で沿岸調査実施のS/Wを締結した。このS/Wに基づき昭和53年5月より本体調査団を派遣したが、ガボン側の漁業に関する行政機構は十分に整備されておらず、又これまで諸外国からの漁業技術協力を受けた経験が乏しいこともあり、先方の受入体制がなく、十分な沿岸漁業調査を実施し得なかった。

上記の次第により、取敢えず本調査を打切ることとしたが、後発発展途上国に対する協力の難しさと、今後本協力を推進して行く上で参考に供するため本報告書を取りまとめたものである。

こゝに本指導の任にあられた団員各位、並びに御協力を賜った外務省、農林水産省及び、現地日本大使館並びに内外の関係諸機関の方々に対し、深甚の謝意を表すると共にあわせて、今後の御支援をお願いする次第である。

なお、ガボン政府は今后受入体制の確立を図り、再度日本に協力を求めたい意向を有していることを申し添る。

昭和53年11月

国際協力事業団
林業開発協力部

掘 健 治

目 次

1. はじめに	1
2. 調査計画の概要	1
3. 調査員構成	1
4. 調査員面接者一覧	2
5. 調査日程 ガボン共和国沿岸地方地図	2
6. ガボン共和国概要	7
6-1 人 口	7
6-2 地 理	7
6-3 歴 史	7
6-4 社 会 情 勢	8
7. 調査経過の経緯	11
8. 漁 業 生 産	15
8-1 沿 岸 漁 業	15
8-2 オムボエ(ラグーン)漁業	22
8-3 ランバレネ淡水漁業	27
8-4 養 殖 漁 業	33
8-5 入 漁 料	34
8-6 諸外国との漁業協力	35
9. ま と め	36
〈別添資料〉	
(1) S/W 合意録(和文)	41
(1) S/W 合意録(仏文)	44
(2) 議事録、覚え書(和文)	48
(2) 議事録、覚え書(仏文)	49
(3) 口上書、報告書(和文)	56
(3) 口上書、報告書(仏文)	59

1. はじめに

ガボン共和国政府は昭和51年12月、わが国に対し第3次5カ年計画(1976~80年)の一環として水産業開発計画を提示するとともに、この開発計画を推進するための協力を要請してきた。

ガボン沖合水域は豊富なカツオ漁場でもあり、又、同国との友好関係を維持促進する必要性があることから、わが国はこの要請に応じることとし、昭和52年3月陸上調査チームを派遣し、翌年9月には、具体的な水産資源沿岸調査実施計画S/W案の細目打合せ協議のための協議チームを派遣し調査実施案の細目の策定を行った。(別添1)

更に沿岸調査に先きだち、今年3月には5月より始まる本格的調査を円滑に行うための必要な事項の処理ないし準備を目的とした調査チームを派遣し、それによって事前準備についての双方の確認を行った。(別添2)

今次調査はそれらの経緯を経て実施されたものである。

2. 調査計画の概要

ガボン沿岸及びオムボエ(ラグーン)水域における沿岸水産資源を明らかにするとともにわが国より2名の調査員を派遣し、調査船(10 ton)とそれらに使用される資機材を使い漁獲操業試験調査を実施しそれらに平行して、漁具漁法の普及を沿岸漁民の技術の向上に協力するものである。

1. 漁場の環境調査
2. 漁獲試験
3. 生物調査
4. 漁獲物統計
5. カウンターパート及び漁民に対する技術訓練
6. 調査報告書の作成

3. 調査員構成

氏 家 勝 (ニュースターフィッシャー・コンサルティング株式会社)

担当 漁撈 任期 53年5月25日~8月14日

氏 齊 藤 宏 (国際協力事業団林業開発協力部水産業技術協力室)

担当 漁業 任期 53年5月25日~9月15日

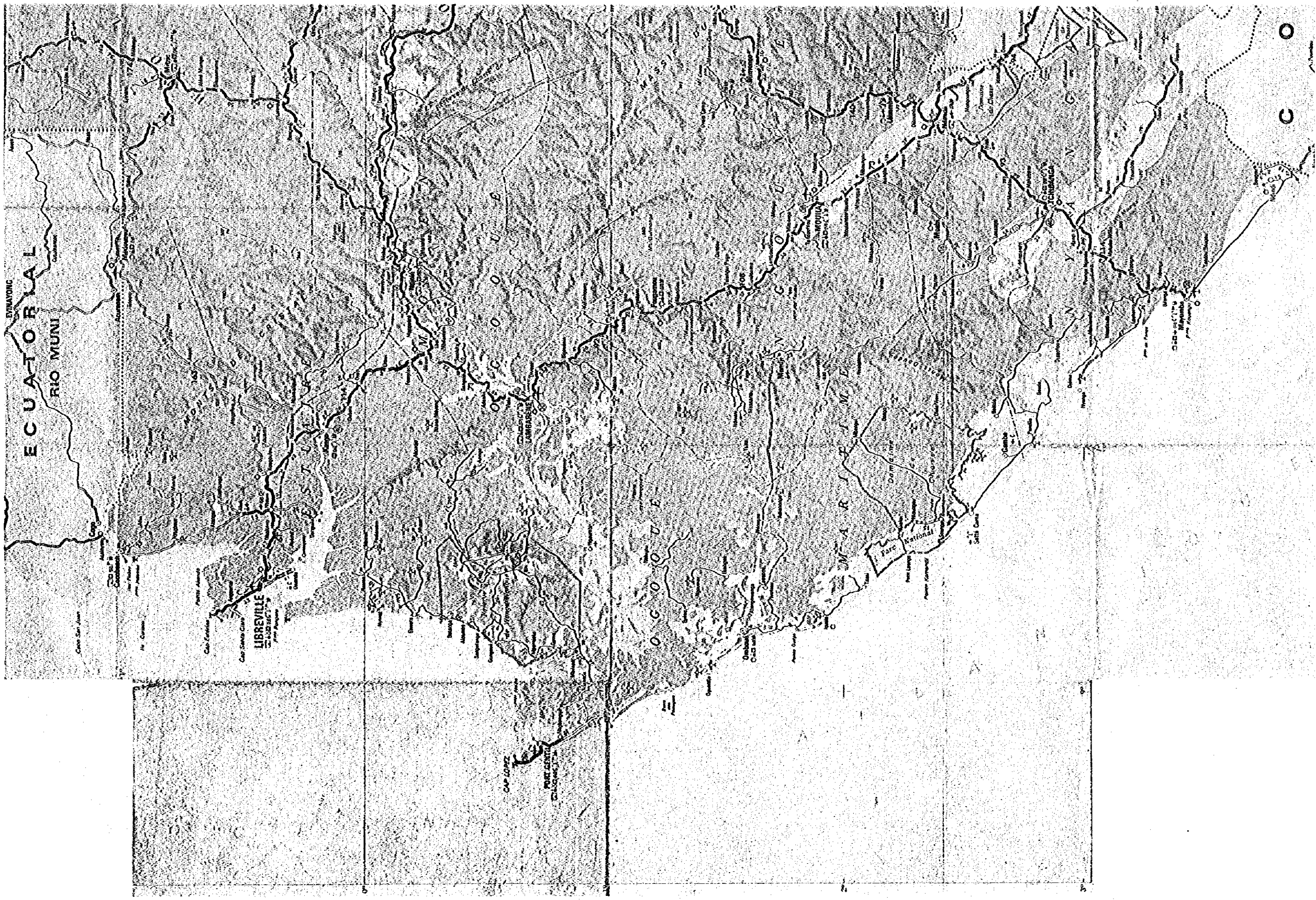
4. 面接者一覧

水産森林大臣 Mr. MARCEL IBINGA
水産森林省次官 Mr. NZENGE
水産局長 Mr. JULIEN BIGNUMBA
大統領直屬顧問 Mr. MICEL MOUSSANOU
大蔵省顧問 Mr. LEFEME
海上輸送局顧問 Mr. BRANEYRE
税関局長 Mr. J. A. MASSOUEGA
経済計画省顧問 Mr. JULIEN
外務省・アジア局長 Mr. MYTOULOU BORNARD
オムボエ県知事 Mr. JOSEPH MOUEILE

5. 調査日程

53年5月25日(木) 調査員本邦出発
5月27日(土) リーブルビル着
5月28日(日) 水産局表敬・次長Mr. Rogerと実施調査について協議
調査船整備・造船所廻船等の打合せ・VISA申請
6月5日(月) 水産局長表敬・資機材等の引き取りに関し協議
各省庁担当に対する資材引き取りに関する協議(大蔵計画、外務、
税関)
6月16日(金) 水産庁チャーター便にて斉藤団員オムボエ出張
冷蔵庫修理及び漁民の選考について担当と協議
宿泊等の受け入れ準備の調査検討
6月20日(火) 水産森林大臣表敬・実施調査の説明及び早期資材引き取りに関する
要請
経済計画省顧問表敬・調査の説明・資材に関する協議・調査船等の
整備
6月24日(土) 氏家団員オムボエ出張・冷蔵庫修理の為、オムボエ地域状況調査
6月29日(水) 大統領直屬顧問表敬・資材早期引き取り再要請及びその他の現状問
題点についての協議
調査船整備(エンジン等)

- 7月 4日(火) 午前 OWEND 港より資材搬出作業
午後 * 調査船受け取り ACAE造船所廻航実施
造船所修理作業立合
- 7月 8日(土) 調査船 エンジン トライアル テスト実施
- 7月18日(火) 修理終了 ACAEより LIBREVILLE 漁港に廻航実施
漁民の選考実施・漁具類の整備
- 7月24日(月) 底刺三枚網による試験操業実施(ギニア人3名乗船)
- 7月27日(木) 局よりの指示により操業中止
漁具類の整備及び船作業
- 8月 5日(土) ナイジェリア、大洋合併 OSADJERE社 西原氏来局
漁業実情及び各漁村、市場等の視察同行
大洋負担によるオムボエ地域視察同行(航空機のみ負担)
- 8月 9日(水) 在日本大使館において、問題点及び今後の対策について協議
(調査員の一時帰国及び資材保管)
- 8月11日(金) 在日本大林大使、水森省官房長と問題点等につき意見交換
氏家団員本邦帰国
- 8月12日(土) 団員在日本大使館において健康診断
- 8月16日(水) 局次長 Roger に調査船取り扱いについて海上実習実施
調査船作業
- 8月19日(土) ACAE造船所において再修理について打合せ
- 8月23日(水) 調査船ACA E造船所へ廻航実施
造船所修理作業立合
- 8月31日(木) 海上輸送局顧問と調査船の係留場所選定について協議
- 9月 2日(土) 調査船修理終了、リーブルビル漁港へ廻航実施。
(鈴木書記官同行)。
- 9月 5日(火) 資材等保管作業実施、漁具類整備
- 9月 6日(水) 調査船 係留 作業実施
各担当者との懇談会出席
- 9月12日(火) 斉藤団員ガボン発、本邦へ帰国



6. ガボン共和国概要

6-1 人 口

人口は約85万人で約40以上の部族より構成され、言語も部族によっては全く系統を異にするものである。主として北部に住んでいるファン族が最も多くその数は人口の半にのぼり、その他バフター族、バコタ族、バケレ族、シェネ族等が主要なもので、ピダミー族も最も古い原住民の一つとして約3,000人ほどいる。1平方キロメートル当りの平均人口は3.5人で、自然人口増加率は1%弱である。約2万人の外国人がガボンに居住しており、そのうち約15,000人はフランス人である。

6-2 地 理

面積は267,667平方キロメートルで、わが国の約3%である。赤道が首都リーブルビルの南を通っており、国土は北緯2度から南緯3度、東経9度から14度に位置している。北部でカメルーンと赤道ギニア、東および南部でコンゴ人民共和国と接しており、西側は大西洋に面している。

首都リーブルビルは大西洋沿岸にある。人口120,000の静かな町である。

都市としては、木材の積出し港であるポートジェンテ(4.5万人)、シュバイツァー博士が住んでいたランバシネ(10,000人)等がある。

気候は、典型的な赤道熱帯型で、5月から9月までが大乾期、10月から12月半ばまで小雨期、12月半ばから1月半ばまでが小乾期、1月半ばから5月半ばまでが大雨季となっている。平均気温は25℃で雨量は多く3,000ミリを超えるところもある。

6-3 歴 史

欧州人の到来前のガボンの歴史は明らかでない。14世紀末、ポルトガル人が、この地域に到来し、たまたま寄港した川口にあった山の形がガバオン(ポルトガル語で帽子付外套)に似ていたので、この地をガバオンと呼び、それが国名の起源となった由である。しかし、欧州人がこの地に定住しはじめたのは16世紀になってからであり、ポルトガルのイエズイット会の伝導師が沿岸地の活動の根拠地を設け出した。

19世紀に入るとフランスが奴隷貿易のためにこの地域にまで足を伸ばすようになり、1860年にはオグエ川の源の踏査が始められ、1887年にはコンゴ(首都ブラザヴィル)を探検したサボルニヤンド・ブラザがこの踏査に加わっている。

次第にフランスの植民地行政が組織され出したが、本国との関係は奴隷貿易が依然として中心となっていた。

独立運動は、レオン・ムバを中心に推進されていたが、フランスのアフリカ植民地の独立政策に従って、1958年9月28日、フランス共同体の内での自治国となった。その後同年11月28日共和国宣言を行ない、1960年8月17日に独立1961年1月にはレオン・ムバが初代大統領に選出され、1967年11月28日に病死するまでその地位にあった。後任には、副大統領であったボンゴが昇格し、現在に至っている。

6-4 社会情勢

過去数年のガボンの政治、社会情勢は極めて安定している。これはボンゴ大統領が1967年に大統領に就任して以来、自ら組織した単一政党（ガボン民主党）により国内をがっちり抑え、アフリカ諸国にありがちの部族間の対立や地方主義に対しても極めて細かい神経を配っていることによる。例えば、毎年の独立記念日には順次異なった各州の首都で式典を遂行し、その機会にその地方の開発を行うなどして地方主義の解消に努めている。

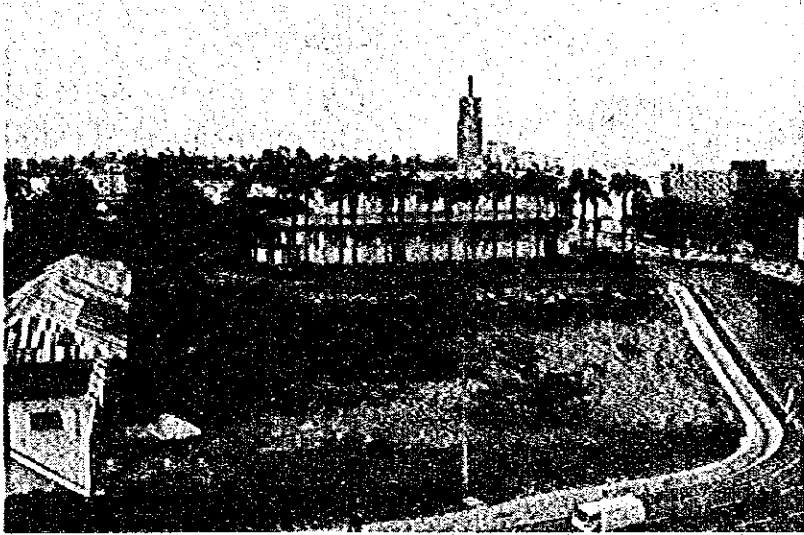
ガボンは石油危機以来、石油の増産と価格の高騰により国家経済は一大好況時代を現出した。このため1975年の国家予算は前年度比211%増という、驚異的数字を示し、又1976年についても、前年度比28%増で約878百万ドルの規模をもつに至る一方、歳入の大宗は専ら石油収入によって賄われ、国民に対しては増税もしくは新税を課する措置は採っていない。

しかしながら、この経済的活況は必然的にインフレを招来し従来から物価高で（特に食料品は殆んど外国より輸入に仰いでいる）あった同国の消費者物価指数をさらに高めている。

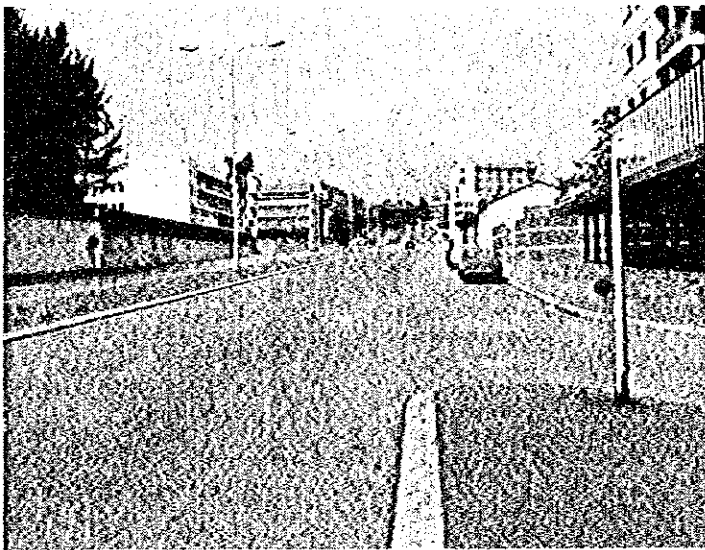
このため政府は生活必需物資及び家賃の価格凍結令を公布したほどである。更にガボンのかかえている問題点としては国家経済の支柱が石油、マンガン、ウラン等の地下資源となっている一方で農業が原始的なまでに未発達であることである。この事態は食糧の大部分を外国に仰ぐことを必然ならしめている。また、地方青年は農村を捨て都市に集まることとなり、ますます地方過疎現象を招来している。又、国内労働力不足の問題もかかへており、国内労働力と言われる人々は、近隣諸国（カメルーン・ベナン・トーゴ等）からの出稼ぎ労働力に頼らざるを得ない状態である。

首都リーブルビルの物価は世界でも最高の部類に属する。その理由は外国人が使用できる現地生産品がほとんどないため、必需物資（食糧を含む）はすべて輸入に依存するうえに輸入税またはこれに伴う内国税と輸送費、それに輸入を独占するフランス資本の利益が加算されるからである。物価はバリの3倍と思えば間違いはない。

又、宗教については、都会では、カトリック教徒が多く、数は少ないがプロテスタントもいる。内陸ではアミニスト（原始宗教）が、一部残っており、他には少数の回教徒もいる。



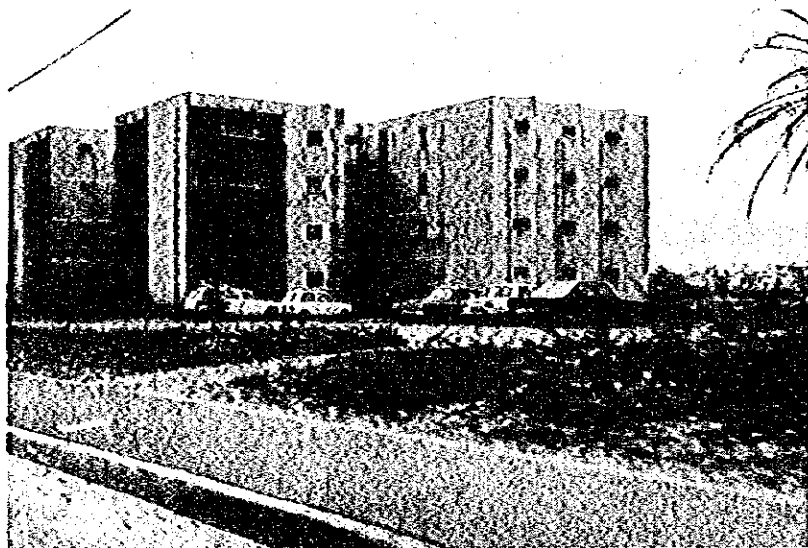
首都リービルビル市



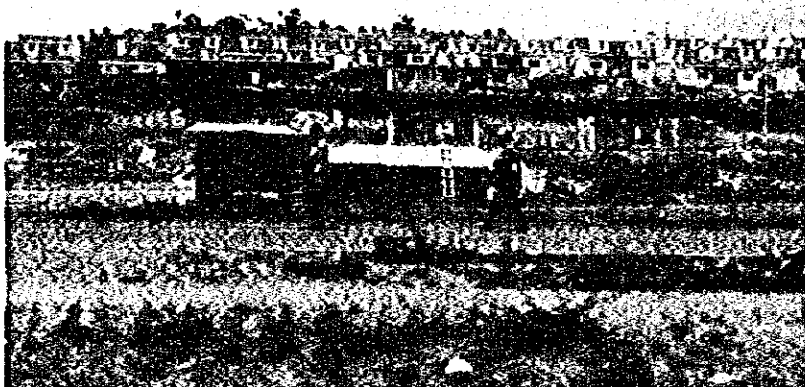
首都リービルビル中心街



ルービルビル郊外



リービルビル市内にある
公務員用宿舎



ユーゴスラビア技術協力に
よる公務員用宿舎の建築風景
(1戸建)

7. 調査経過の経緯

5月27日(土)予定通り団員2名、ガボンレオバ国際空港到着。水産局より次長Mr Roger 同職員M MBa及び日本大使館鈴木書記官の出迎えをうける。

翌28日(日)より、すでに到着している調査船並びに資機材確認のためのリーブルビル市より約20 Km 離れた所にあるOwend 港に出むき調査船の係留場所の変更および整備作業を開始する。

5月29日(月)水産局を訪問したが局長M.Biyumbaは身内の不幸のため不在であり、次長Rogerと今次調査についての協議を行ったが、前回我が方が3月来ガの際作成した覚え書確認の域をでなかった。

その後は、調査船の整備、通訳の備用等の業務を進めながら6月5日(月)になって初めて水産局長と連絡をとることができた。

局長は調査員の来ガを歓迎する旨述べると共に冒頭より、今次調査に伴う基地予定地オムボエ、ポートシェンテ両地域の受け入れ体制が未だ確立していないこと、又局に対して負担分をまかなう予算措置について許可がおりない等、当初より、今次調査の協力体制のむづかしさを述べた、我方は上記の条件の下で当面協力できる範囲として、船及び資機材を受けとり、首都リーブルビルに留まり、この水域での当該調査を実施する旨、ガ側に伝えた。

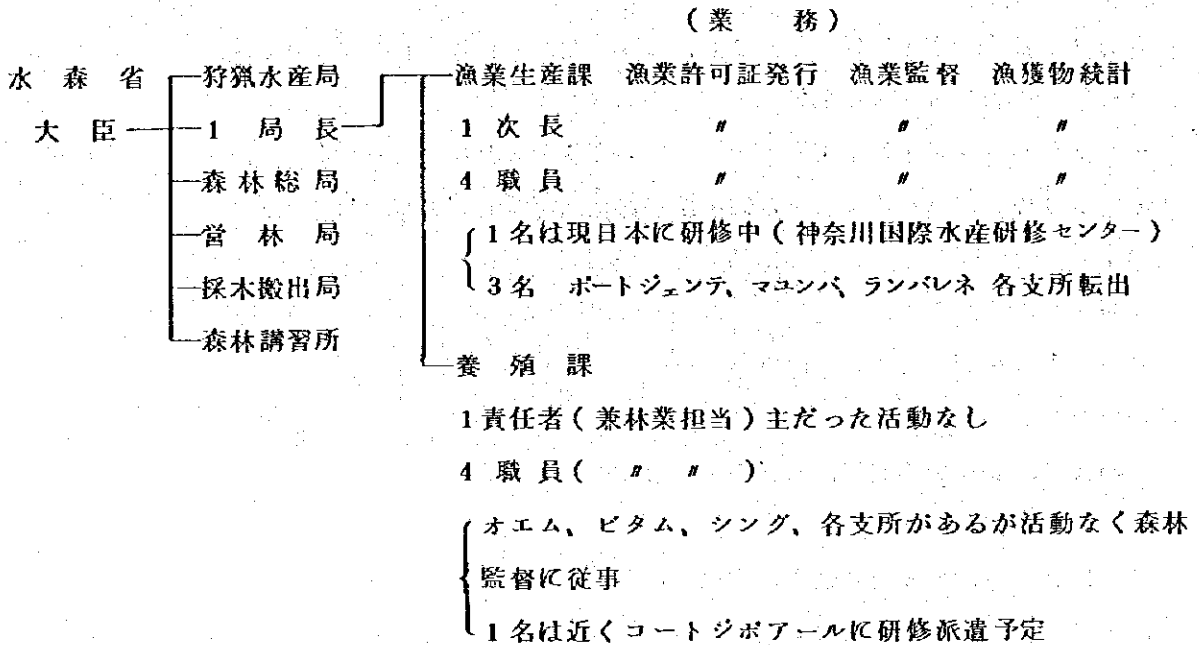
一方、船及び資機材の受け取りは荷役を行ったCOMACO社に対し、上記理由で手数料の支払いがなされておられないため作業進捗せず、我方は在日本大使館と話し合いを持ち、日本側はすでに資材についてはCIF建で実施しているため現地着後の経費についてはガ側が負担すべきである旨をガ側に申し入れた。

しかしながら局に予算がないことから、それ以上の進展がみられず、我が方は大蔵省顧問及び大統領直屬顧問に面会を求め、現状を説明し、資材に対する早期引き取りの要請を重ねた、この努力が実り7月4日(火)に致り、すなわち、現地に資機材到着して2ヶ月、我々が来て40日を経て、全購送資機材の受け取りを完了した。

なお、調査船は、長期に渡るOWENO 港係留のため船体、船首部、探照灯および防船材等について破損がみられたため7月4日に早速ACAE 造船所に廻航し、修理には我が方より立会監督並びに機関等の整備を行い7月18日(火)に修理を完了した。

現在、水産局の職員は5名であるがリーブルビルには次長Roger のみの状態で、他の4名は1名日本研修中で、他は地方に転出発令され、我々の作業時の協力は殆んど不可能な状態にある。したがって修理后調査船をOWEND 港に廻航した時も、その後のリーブルビル港廻航に際しても局よりの協力はなく、我々2名のみでの作業による有様である。

水産局組織図(1972年設置)



調査船修理後、我が方は早速明日からでも調査を実施する旨、局側と協議したが、前回同様予算がない理由から、ガ側が当然準備すべきカウンターパート、漁民の手配も行なわず、何ら対応の姿勢なく、我が方は、新たに発生したこの問題を解決しなければならなくなった。

なお、この問題には予算以外に次のような問題点が介在している。

ガボンの沿岸漁業に従事する漁民のすべては近隣諸国のコンゴ、カメルーン、ギニア、ナイジェリア、ベナン等の外国人に営まれ、ガボン人の漁民を海岸地域にみることはない。

これら外国人漁師は各別個に漁村を作り、カヌー(ピログと呼ぶ)に船外機をつけて、主に刺網等の漁法を行っている。一方、ガボン人の漁師は海岸地方には見られないが、彼等の漁場は主に内陸の湖沼及び広大なラグーン水域で、沿岸水域に出ることはない。

したがって、リーブルビルで、ガボン人の漁民を見出すことがむづかしいこと、また地方から集まると宿舍、手当等の経費を要すること等、局の手配のはかどらない理由がここにあるわけである。

次にカウンターパートの件についていうと、前回準備チームがこの点の確認を行っているにも拘らず、水産局は次長1名のみで他は転出して、全く、候補者があてがない。現在セネガルにおいて研修を受けている3名が10月末もしくは11月に帰国するからという話はあるが、これとて水産局に正式採用されるという確信もない状況である。

7月19日(水)に至って我方より同計画の活路を見いだすべく実施調査に関する昨年末よりの経緯、現状と問題点及び我方の提案等につきレポートを作成して、ガ側外務省アジア局長に、大使館より口上書として提出した(別添3)。

また、日本側として現状報告を公信によって報告した（8月9日外務省より善処方検討中との回答あり）。

しかしながら、問題点解決について何ら進展のきざしなく、この時点で無為にすこす日々からくる団員の精神的疲労が増加した。終に解決策として、局の了解をとりつけ、我が方独自に漁民の選考を行いギニア人3名を雇用することにした。

7月24日（日）より27日（木）まで、彼等を使って底刺網（5反）による試験操業を実施する。彼等には調査船のような船の作業は初めてであるが、水深7～13mの沖合の漁場で、エイ、ニベ、イセエビ、カニ、ツワモノナマズ等の魚種を最高の日で一度に35Kを漁獲した。適切な漁場の判断ができれば、さらに漁獲をあげたと思われるが、試験操業中局よりは1人の協力もなく、また操業に関心を示すどころか逆に我が方が局の了解の上備用した外国人漁夫について、事故の場合、手当等について支障をきたした場合等のいろいろのケースを述べたて、日方協力の主旨にそわないことを理由に停止指示がだされたものである。我方としては彼等に日当を支払ってはいるが、ガ側との摩擦をさける観点から先方の指示に従うこととした。

操業中止後は網の修理、船の整備を進めながら、毎日局に出むき、計画を円滑に進める方法について協議を行ったが、いっこうに進展をみづ、我々の理解できない理由をくりかえし述べたが最大の理由は予算に帰結すると云うことができる。

局長との協議にしても、彼の専門が水産でないため、本協力に関する認識が稀薄であり、その場しのぎの主旨を述べるなど、誠意を疑われるような発言もあった。しかしながら局の気分を見ると、ガ側は団員を受け入れた以上、予算の処置がなされていない状態でも、体面上から協力出さないとの発言は一度もなかった。

このような状況の中で、8月4日（金）日本側より、現状報告と、今後の対策協議を必要とするため団員の一時帰国、および資材については、ガ側がカウンターパートの準備をせず技術移転が困難である、現状では十分な管理が実行されない理由で、一旦、日本に返送せよという連絡が入った。

これに対し、我が方は在日大使館と協議の結果、次のような回答を日本側に発信した。

すなわち、現在、本協力の具体的な進展を見られないが、前述の我が方の口上書には一応善処検討中とはいえ、何らかの回答を受けており、これを冷静に観察すれば、ガ側は本協力に反対しているわけではなく、緩慢ながらそれなりの手法で対応しているといえる。

また、資材については、当国の新聞にも報せられぬ1 GADONの船名が書かれている関係上、現実の問題として、これをすべて日本側に持ち帰ることは、ガ側に穏かな印象をあたえず、今日までの協力が逆効果をもたらす恐れすらある。

このような状況下にあるため、在日大使館は水産局と協議し、団員については、いったん

帰国させるが、資材については、当調査が再開するまで、在日本大使館が水産局と協力しつゝ保管することとした。またもし将来再開のめどがたゞない場合は目下日本で研修中のOND Eyi (集団沿岸漁業コース) に対するフォローアップ用機材として供与することが適当でないという結論に達した。

我が方は、これらの主旨にもとづき、資材については在日本大使館構内に保管し、調査船については海上輸送局顧問と保留場所について協議に入った。保留場所決定までの間の8月11日(金)に氏家団員は先発として帰国した。ところが、その後リーブビル港に停泊中の調査船は夜間他船の接触により船首部を破損し、8月20日再度ACAIE 造船所に修理のため廻航せざるを得ないこととなった。なお、修理費はACAIE 造船所の負担である。

また8月11日(金)には日本側公信の指示に従い、大林大使は水森省官房長 Mr. Ngenge (Ibinga 大臣は独立記念行事のため OYEM に出張中) に面会し、日ガ漁業協力の伴う諸問題につき意見交換を行った。官房長よりは、ガ政府として、まづ日本への感謝をのべ、ついで、ガ側として今回団員を受け入れたにも拘らず早急に措置がとられず、迷惑をかけたことに陳謝の意が述べられた。

また、○カウンターパート及び指導対象漁民の選考については事務当局で作業中

○資機材の保管場所は検討中

○本協力に対してガ側は明年度に300万CFA (1CFA=1円) の予算要求中

○車輛等の輸送手段は目下大蔵とその経費について折衝中

以上の点が彼より回答され、ついで大使より我が方で作成したレポート(別添3)を再度手渡し、日本側としては本協力案件について、すでに1億円を越す支出を行っているので、これを成功させたいという考えに変わりはないことだが、一応現時点で、報告と今後の対策協議のため団員2名を帰国させるが、ガ側の分担事項についての協力準備が整い次第再度団員の派遣について検討する用意がある旨つたえた。

我方は、日本側が本件調査を再開するか否かは万事ガ側のでかたにかかっている旨説明し、ガ側の分担についての準備を再度要請し協議を終了した。なお、協議中ガ側は団員の帰国については了承しつゝも、これをもって本件が打切られることを恐れ、不安の表情をかくせなかった。

8. 漁業生産

8-1 沿岸漁業

ガボンには南北に約739 Km に及び、海岸線を有し沿岸にはイセエビ、エビ、ニベ、スズキ等の底魚、沖合にはマグロを始めカツオ、イワシ類の浮魚の好漁場が有るが、乍ら大規模漁業といわれるものではなく、僅かに30~120 G/T 級のトロール船17隻に依る近海トロール漁業（中規模漁業）と沿岸に点在する漁民のカヌーによって営まれるカヌー漁業だけである。

1975年度の全漁獲量は近海トロール船によって揚げられた分が3,088 ton、カヌー漁業及びその他、内水面によって揚げられる分が3,100 ton、計約6,200 ton 程度である。

魚種についても、近海トロール船によって主に漁獲されるニベ、スズキについてはその全漁獲量の30%にもなり、次いでタイ類となっている。内水面についての魚種については、その大部分がテラピア及びナマズ類等によって占められている。

1970年より75年までの近海トロール漁業の水揚量は下記の通り。

1970年	2,250 ton (注、水揚報告の義務づけられた船のみの記録による)
1971年	2,900 "
1972年	3,000 "
1973年	4,500 "
1974年	3,099 "
1975年	3,088 "

1975年における魚種及び月別水揚量は次の通りとなる。

(ton)

魚種 (仏名)	(和名)	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計	%
BARS	スズキ	30	15	45	58	45	43	35	67	64	43	34	28	507	16
CAPITAINES	ニベ	25	21	35	12	58	67	61	79	39	29	16	14	456	14
DORADES ROSES	マダイ	20	11	30	29	14	15	10	16	15	15	19	23	221	7
DISQUES	スガレダイ	16	12	29	12	12	17	9	16	15	18	14	16	186	6
DORADES GRISES	クロダイ	21	15	13	21	17	10	15	27	30	17	11	19	216	6
MACHOIRONS	ソワモノ ナマズ	19	10	10	21	16	10	12	21	19	15	17	15	185	5
SOIES	ソタピラメ	14	6	11	13	8	8	10	21	16	13	10	13	143	4
BOSSUS	小型スズキ	22	20	31	39	10	-	-	3	-	12	10	-	147	4
ROUGETS	アカモノ	13	2	12	10	6	4	7	13	7	11	15	11	111	3

GROS	大型魚	7	3	4	8	8	10	8	8	13	13	12	3	97	3
MEROUS	メルルーサ	15	10	14	21	5	8	5	-	-	8	5	-	91	2
FRITURES		10	8	10	9	17	5	-	-	-	6	9	-	74	2
FIETANS	オヒョウ	6	-	3	4	-	2	-	1	-	6	4	1	27	1
RAIES	エイ	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	4	1
THONS	マグロ	21	10	6	1	9	13	10	17	16	10	11	-	124	4
BECUNES	カマス	3	1	1	2	2	3	7	6	4	-	2	17	48	1
CREVETTES	エビ	2	-	1	-	1	1	5	2	1	-	1	-	14	1
CRABES	カニ	1	-	-	9	1	2	5	5	4	-	1	-	28	1
LANGOUSTES	イセエビ	1	-	-	-	1	-	3	3	3	-	-	-	11	1
SEICHES	イカ	1	-	1	-	-	-	4	-	1	-	-	1	8	1
CALMARS	ツノガレイ	1	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	1	5	1
CONGRES	アナゴ	5	2	1	-	-	-	6	4	-	-	4	2	24	1
OMBRINES	イシモチ	1	-	-	-	-	-	1	-	5	-	-	-	7	1
ROUGES		9	4	2	10	9	-	6	-	-	-	11	-	51	1
BARBILLONS		5	2	1	-	1	3	5	-	9	-	3	-	29	1
DIVERS	雑魚	20	19	16	10	12	8	92	17	16	9	6	49	274	8
TOTAUX	計	289	171	276	289	252	229	320	332	272	229	215	214	3,088	

(注、上記統計は、水産局より漁業許可を受け水揚量の報告を義務づけられた船のみの記録である。)

この表でもわかる通り水揚量についても、周年一定であり、操業場所もたいした移動もなく同水域で操業している事が多く、ここ数年の魚体についても小型化傾向が見られていない。これら近海トロール漁業で揚がる魚類はその大部分が首都リービルビルにおいて消費されている。

然し基地としているリービルビル漁港の陸上施設が貧弱で特に製氷設備が悪くこれらにたずさわる。給船に対する氷等の供給が十分にまかないきれず、よって漁撈活動について制約されることも、しばしばある。又、漁獲物の流通については、各地の冷蔵設備及び内陸部に通じる交通路の悪さも重なり、その供給範囲はこのリービルビル市街地に限定されることからして、これらトロール漁業の急速な発展拡大はまだ先になると思われるが、しかし、これらによって獲られた魚は、住民の重要なタンパク源でもあり、将来はこれらの漁獲増大を計る事は、必要があると思われる。

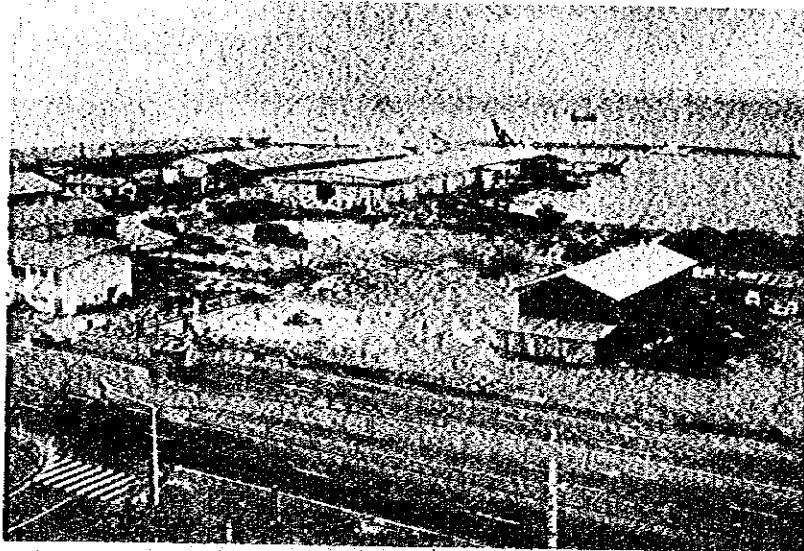
ガボンの海面小規模漁業はその大部分が、沿岸及びそれに隣接するラグーンにおけるカムーによって行われている。小範囲漁業が主であり、漁獲魚種もヘリング(サッパ)、ニベ、

スズキ、ヒラアジ、テラピア等を主に刺網及び 網によって漁獲している。

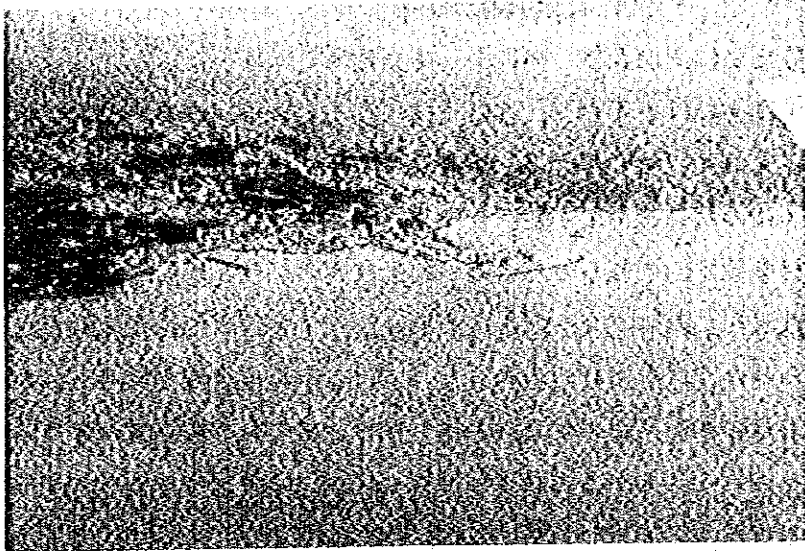
沿岸漁業に従事している漁民はそのほとんどが、近隣諸国よりこのガボンに移住したダホメ、ナイジェリア、トゴートによって営まれており、ガボン人は殆んど見られない。約10m前後のカヌーに20~40IPの船外機付で1隻に5~8人程が乗込み操業を行っており、漁村は自給自足の体制で各漁村を設け、これらの個々との連携はない。我々が訪ずれた漁村はどこも活気がみられ、これは現在このガボン沿岸が他の国の沿岸より資源的に恵まれ豊富なことにも関係していると思われた。今后これら現在行われている小規模漁業を健全な形で発展させる為には、やはり沿岸の海面漁場の開発を実施しなければならず、又沿岸漁業に適合した漁具の普及にも力を入れる必要がある。さらに冷蔵庫や、氷蔵程度が行へる装備を有した小型船の導入をはかる事が急務と思われる。

1978年8月現在のリービルビル附近に散在する各漁村状況は次の通りである。

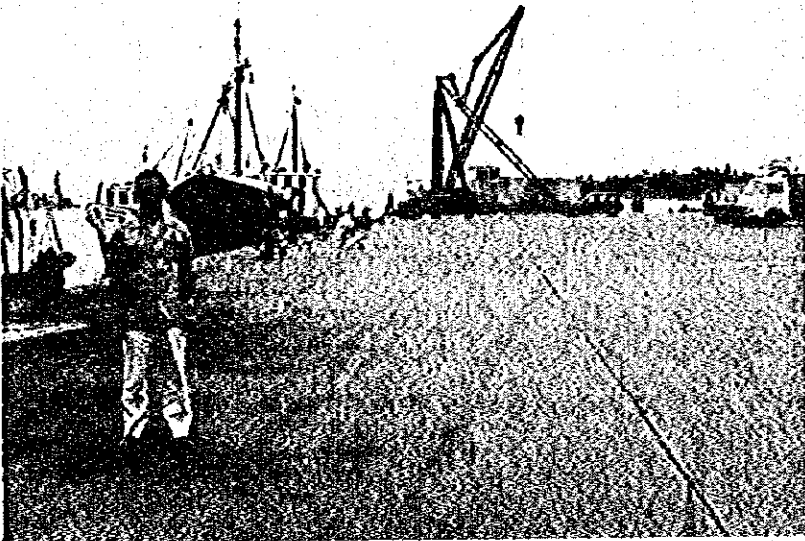
地名	国別	漁民数	漁船数(ピログ)	船外数
AGAE	ダホメ	153	64	68
OWENDO	ナイジェリア	268	98	111
GLASS	トゴート	29	14	13
AVIATION	ナイジェリア	68	48	53
TOTAL		518	224	245



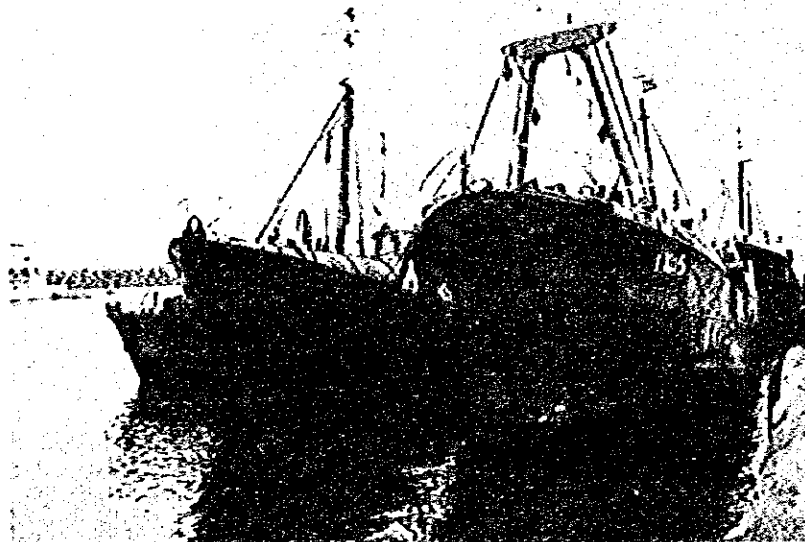
リービルビル漁港全景



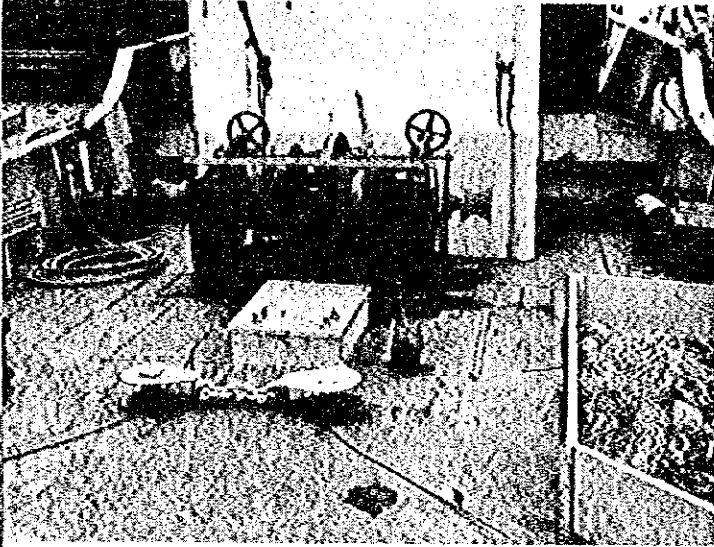
空から見たリービル市
と漁港全景



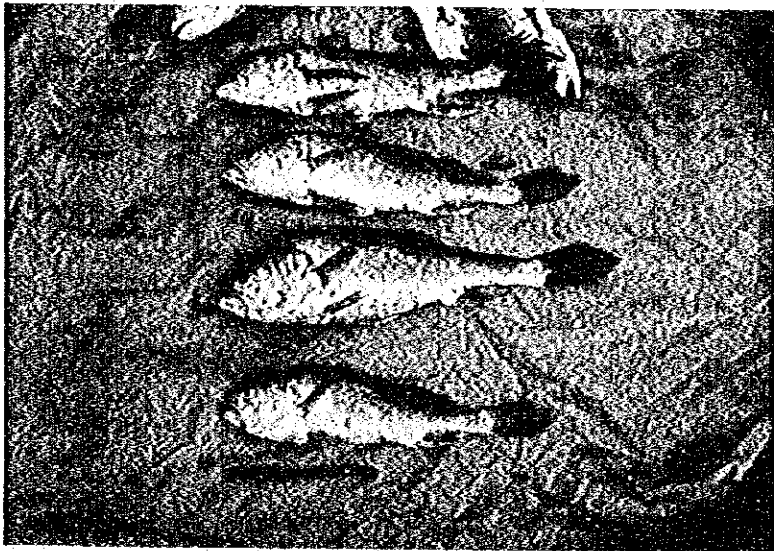
リービル漁港



リービル漁港停泊中の
120ton級、サイド
トロール船



50ton 型スターントロール船の漁撈装備

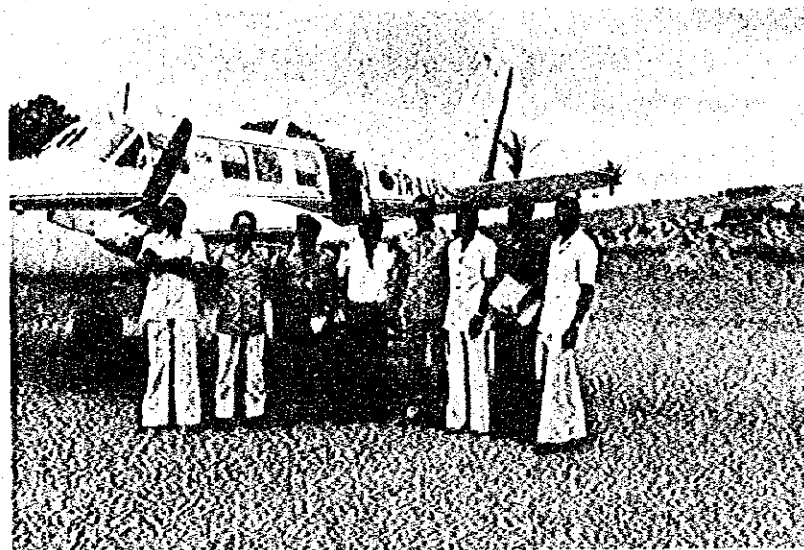


近海トロール船により獲られたニベ（ボールペン長さ15cm）

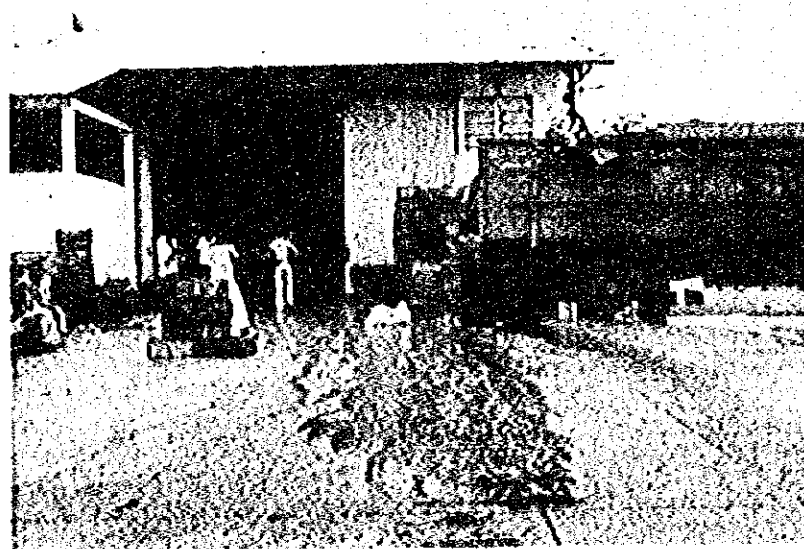


水産局職員一同

左より Pilix,Ondo, 斉藤団員,
Mba,Alogho 職員及び
Roger 次長



オムボエ空港にて 左より
オムボエ副知事, 斉藤団員,
森林監督官, チャータ便
パイロット, 海上輸送局長,
水産局長, Ondo 職員及び
外務省アジア第1課長



リービルビル漁港より鮮魚の
トラックによる内陸部搬出



リービルビル市内にある
仏人経営による鮮魚売場
サバ、カニ、イワシ、乾エビ、
鮮エビ、マスの類
鮮魚はフランスより輸入品



ツワモノナマス、小型ニベ、
シタピラメの現地産売場

8-2 オムボエ(ラグーン)漁業

オムボエ県人口9,000人 オムボエ村人口2,000人(半農半漁)

地先から拡がるラグーン全域が漁民の漁場となっている。漁村20 漁民124名

カヌー数 70隻 船外数(6~40HP程度)普及率70%、1975年度漁獲量300ton

主要漁具 旋網、刺網、釣類 魚種、テラピア、ボラ、シタピラメ、マナガンオ、ニベ、エビ

漁期 7~9月 海よりの出口Oguendjo附近が良い

4~5月 エビ類が漁獲される(Obatanga 附近において)

7月~9月の好漁期は乾期に入っているため、2~3月の雨期に比べ、そのラグーン内の水面積が70%位に減少するため、海洋性の魚シタピラメ、ニベ等の漁獲が良くなるとの漁民の報告である。今回我々がオムボエの市場等でよく見かけた魚は、ボラ、テラピア、スズキであり、鹹水性の魚種が多く、海洋性の魚種はあまり見ることはなかった。又、この地においては雨期は相当量の降雨が有りそれらを考えれば、おそらくラグーン内の塩分が稀薄になるこの時期には海洋性の魚種はラグーン内より適塩度の沿岸水域に逃避するものではないかと思われる。

オムボエの漁民はめったに沿岸に出て漁をすることはなく、大体がこのラグーン内にて漁業を行っている。彼等の言には波の立っている海はこわいとの事で、又使用しているカヌーも沿岸地方で見られる大きなものもなく、彼等の自給自足的な漁業であった。

ラグーンの水深は最大が17mもあり、平均水位は6.5m程で、水底には、多くの樹木等が沈んでおり、底質も泥か砂が大部分であるが、トロールなどの漁法はこれらの障害物の有ることからして不相当と思われるが、底刺三枚網、カゴ等の漁具を使用することは今後の良い方法ではないかと思われる。又、乾期、雨期の漁獲量の変化を知るためにもこの水域における周年的資源の動向調査を行う必要がある。

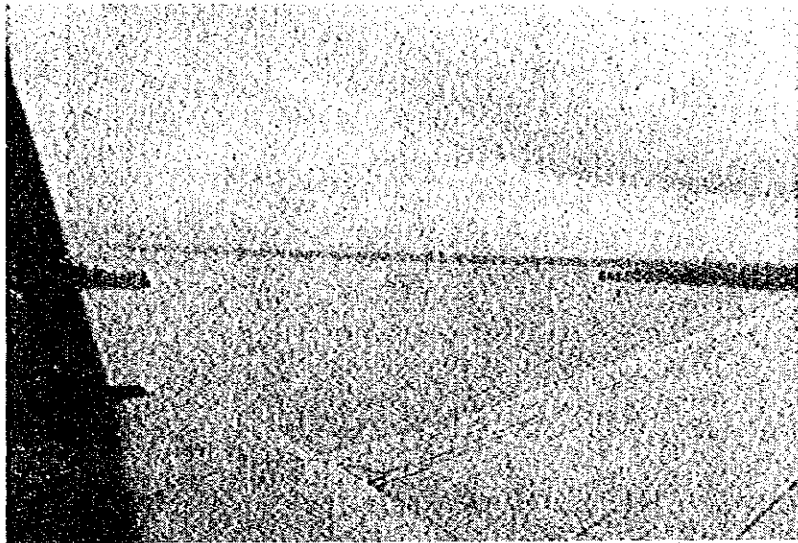
オムボエには政府が1億CFAを出資して建てた冷蔵が有るが、これは現在発電機関係の故障により運転を中止しており、よって、これらに関連して、今のこの地域における漁業は我々の見た限りではあまり活動的な動ではなかった。

冷蔵庫の概要は次の通りである。

貯蔵能力25ton 製氷日産2ton 冷凍機フランス製、発電機ベルギー製150KVA

漁獲物洗浄場二面、製氷ベルトコンベア1台

これには水産局より職員が一名、この管理のために常駐しているが、充分な保守の技術的不足から、故障しても直す事が出来ず、よってこの冷蔵庫も昨年10月より、なら修理の対策も立てられず、現在に至っている。よって鮮魚による販売は少なく塩干品等に加工され消費されている。なお、これら冷蔵庫及び冷凍機における日本よりの保守管理の技術専門家を日本よりとの大臣の賛同があったが、現在のところ正式の要請に至っていない。



オムボエ、ラグーン（機上より）



オムボエ、ラグーン（機上より）



オムボエの漁師のカヌー



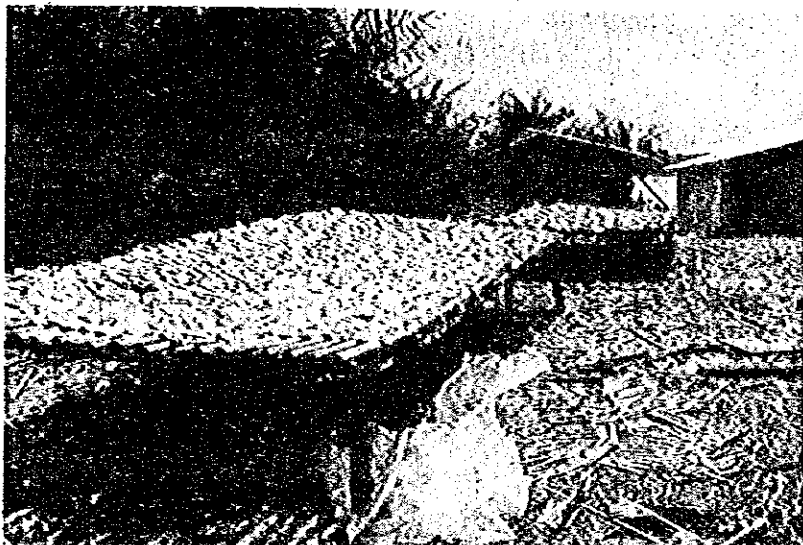
オムボエの町並



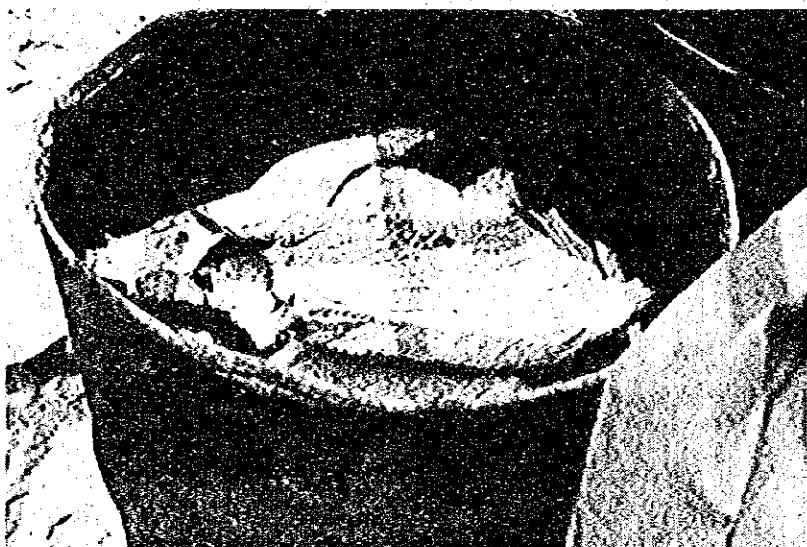
カヌーによる塩干品の輸送
(オムボエー、ポートジェンテ、
110Km)



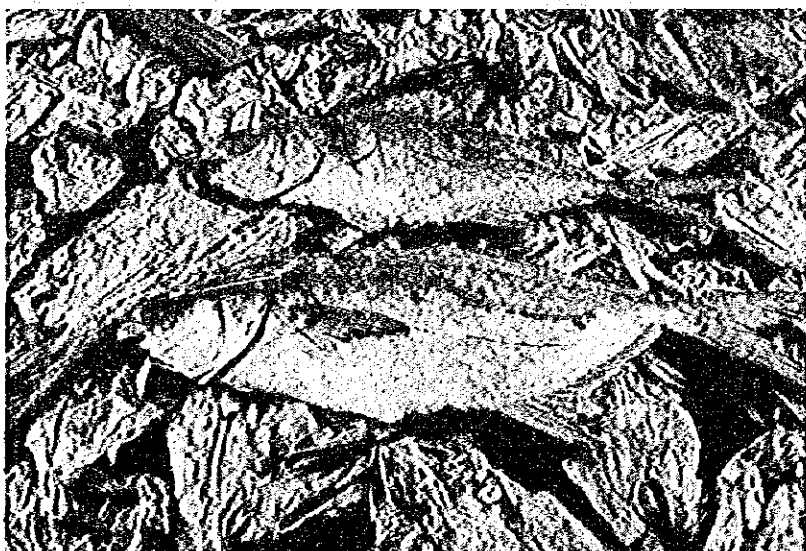
オムボエの漁師の作成旋網



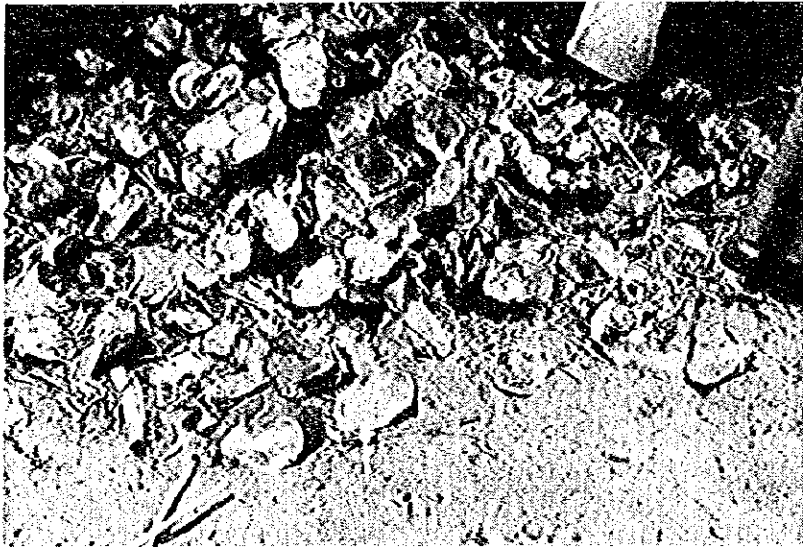
ニベ類の塩干品作業場



大型ニベ塩干品



ヒラアジの塩干品



オムボエにおける天然ガキ
(身は主に底釣用の餌に使用)



底立縄釣によって獲れたヒラアジ